

# メカゴジラの「南方」

## ——東宝特撮怪獣映画作品における怪獣の「南方」問題——

山崎 鎮親

### 一 メカゴジラ・ゴジラ・南方

メカゴジラとは、一九五四年の『ゴジラ』に始まる東宝映画株式会社の製作した一連の怪獣特撮映画に登場する「巨大ロボット」を指す。初登場作品は一九七四年の『ゴジラ対メカゴジラ』。このときのメカゴジラは異星人の建造した侵略兵器であった。その後もメカゴジラはスクリーンに登場したのだが、メカゴジラそのものの設定は、異星人の侵略兵器、日本政府の開発した「対ゴジラ兵器」、自衛隊の特殊兵器と作品ごとに移っていく。

メカゴジラの設定は変遷するが、その名前が示すように、金属のメカとして構成された「ゴジラ」という点は共通している。機械仕掛けの「ゴジラ」であり、ゴジラの模造品といいかえることもできる。また、メカゴジラ

は、つねにゴジラと敵対する位置に置かれる。登場した五作品すべてにおいて、「人類の敵」であったり、人類側の「対ゴジラ兵器」であったりと、立場や役割は変われども、つねにゴジラと戦ってきた。ここには、ゴジラとゴジラとの戦いという大衆文化的欲望をみてとることができる。メカゴジラについて説明しようとすれば、その大枠については以上で足りるだろう。なお、メカゴジラのような巨大ロボットを怪獣に分類することには異論もあるのだが、ここでは東宝ゴジラとの対比という意味で怪獣として扱っていく。

さて、メカゴジラは、呼び名に「ゴジラ」とついているにもかかわらず、また人気怪獣であるにもかかわらず、怪獣評論の世界で取り上げられたことはなかった。ゴジラについて積み重ねられてきた無数の論評や言説の厚み

にくらべ、メカゴジラについては「ゴジラの敵」として位置づけられて終わってしまう。だが、はたしてメカゴジラとはそのようなものにすぎないのだろうか。メカゴジラを読み込むことは不可能なのであろうか。

ここでは、これまで正面切って論じられることの少なかった「メカゴジラ」についての考察を試みる。そして、考察のために「南方」という視点を導入する。「南方」とは日本列島に対する地理的な意味での南方、カロリン諸島、ミクロネシア諸島など南太平洋の海域をとりあえずは指す。ミクロネシア諸島、南方の島々はかつて日本の統治下にあり、「南洋庁」が置かれていた歴史がある。地政学的な「南洋」、そしてイデオロギー的な「南方」へとひろがる。また「南方」は大衆文化の歴史において、「秘境」「未開」「エキゾチック」「楽園」などと彩られ、「秘境小説」「冒険小説」の舞台でもあった。

「南方」はまた怪獣の「南方」でもある。一九五四年に誕生した怪獣「ゴジラ」は南太平洋での水爆実験によって生まれたのだと劇中で推測的に語られた。<sup>1)</sup>一九六一年の『モスラ』、一九六四年の『モスラ対ゴジラ』では南方カロリン諸島の架空の島インファント島の守り神が巨大蛾モスラであった。さらに一九六一年の『キングコング

対ゴジラ』においてはキングコングは南洋のファロ島の魔神であった。『ゲゾラ・ガニメ・カメーバ 決戦！南海の大怪獣』は南太平洋セルジオ島、『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決戦』ではレッツ島、『キングコングの逆襲』では南海のモンド島、『ゴジラの息子』では南海のゾルゲル島。このように、昭和期に製作された数々の特撮怪獣映画においてしばしば南洋の諸島は怪獣の生まれた地、あるいは怪獣のすまわる地とされた。さらにまた一九九一年『ゴジラVSキングギドラ』においてゴジラの原型となる「ゴジラザウルス」が生息していたのも南太平洋に位置するラゴス島であった。かように、怪獣と「南方」との関わりは深い。

「南方」と怪獣との関係についてはこれまで長山靖夫、赤坂憲雄、小野俊太郎らが指摘し考察を展開してきた(長山二〇〇二。赤坂二〇一四。小野二〇〇七)。それらの考察は「怪獣は南方より来たる」というテーゼにまとめることができるだろう。そして、これらの論考の中心にはとくにゴジラとモスラが置かれてきた。ゴジラとモスラにおける「南方」とは何かをめぐる議論が積み重ねられてきた。

では、メカゴジラはどうなのだろうか。メカゴジラは

生物ではない。それは巨大な人工物である。生物であれば、それが未開の島に人知れず生息していてもおかしくない。だが、人工物の場合はどうなのだろうか。ここで思い起こしてよいのは、東宝映画『海底軍艦』（一九六三年）だろう。第二次大戦に敗れた日本海軍、その生き残りである神宮司大佐は再起を期して南方の島にこもり海底軍艦を建造し来たるべき日に向けて備えていた。では、メカゴジラは海底軍艦轟天号なのだろうか。侵略兵器として誕生したメカゴジラは後に「南方」から現れるゴジラへの対抗兵器へと変わっていく。その変容は、大日本帝国の再起のために作られた轟天号が、かつて地上を支配し、いままた地上へ侵攻しその帝国を回復しようとする南太平洋のムー帝国と戦った姿と一瞬だが交差するのかもしれない。<sup>(2)</sup>

急いでもう一つ付け加えておこう。それはメカゴジラとゴジラとの関係についてである。小林晋一郎は『ゴジラVSビオランテ』の原案をはじめとして、怪獣作品を支えてきたひとりであるのだが、彼の『形態学的怪獣論』のなかに興味深い記述がある。一九七四年に登場した「メカゴジラ」について、小林は「初期のゴジラ自身」を読み込んでいる。「恐ろしさ、強さ、しぶとさ、不気味

さ、そして人類に与える脅威の大きさ。それらはいつしかゴジラが失っていった、大怪獣として不可欠の属性そのものではなかったか」と（小林晋一郎一九九三…一五五頁）。小林が一九七四年の『ゴジラ対メカゴジラ』に見いだしたのは、ゴジラ生誕二〇年に原点回帰した「ゴジラ」の姿だった。

なぜ小林はメカゴジラに初期ゴジラを重ねたのか。これについては少々説明をしておく必要がある。ゴジラは一九五四年の初登場以来、一九五五年の『ゴジラの逆襲』、一九六二年公開の『キングコング対ゴジラ』、一九六四年四月公開の『モスラ対ゴジラ』まで一貫して人類にとつての脅威という役回りであった。とくに最初の二作『ゴジラ』『ゴジラの逆襲』はそうであった。その後、『ゴジラ映画』は怪獣同士の対決ものへと推移していくのだが、一九六四年一二月公開の『三大怪獣 地球最大の決戦』において、金星を滅ぼし飛来した宇宙怪獣キングギドラと対決して以降、キングギドラが絶対的な悪、根源的な悪、破壊の神と位置づけられ、対抗するゴジラは次第に人類の味方、地球の守り神となっていく。キングギドラという絶対悪の対極にある絶対善としてのゴジラとなっていた。

一九六六年の『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』、一九六七年の『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』、一九六八年の『怪獣総進撃』、一九六九年の『オール怪獣大進撃』とゴジラの善化は進み、一九七一年の『ゴジラ対ヘドラ』では、人間の産み出した公害の象徴であるヘドラと戦うために、まるで人間の罪をかわって償うかのようにならざるを得ない。ゴジラがどこからともなく現れ、死闘の末ヘドラを退治し去って行く。

ゴジラの変質には怪獣の人気のたかまりも作用していた。一九六六年の一月放映開始の『ウルトラQ』、『ウルトラマン』に始まるとされる「第一次怪獣ブーム」は「怪獣ファン」の時代の誕生を告げた。怪獣は人類の脅威から愛される存在へと変質していく。「第一次怪獣ブーム」そして一九七〇年代の「第二次怪獣ブーム」を受けて製作された一九七二年作品『地球攻撃命令ゴジラ対ガイガン』、一九七三年公開の『ゴジラ対メカゴロ』においてゴジラは地球の平和を乱す悪者と怪獣に対抗する人類の守り神、人類の危機を聞きつけ「怪獣島」からやってくる正義の使者、あたかもウルトラマンのようになっていく。

一九七四年の『ゴジラ対メカゴジラ』はこうした流れ

の上に登場した作品であった。劇中で最初「ゴジラ」の姿で現れるメカゴジラは、かつてのように街を破壊する。異星人の侵略兵器ではあれ、「ゴジラ」として街を破壊するその姿は、あたかも一九五四年のゴジラの再来であるかのようにみえる。小林晋一郎がなぜメカゴジラに初期ゴジラを重ねたのか、その答えは、いつしか「墮落」していった絶対悪としての、人類の恐怖の対象、脅威であるところのゴジラがメカゴジラの擬態した「ゴジラ」に見いだされたからにはかならない。メカゴジラが初期ゴジラの衣鉢を受け継ぐのであれば、ゴジラにまつわる「南方」性はどのようなであろうか。

本論文では、小林晋一郎が見いだしたような、メカゴジラにおけるゴジラ性について、とくに「南方」という要素を中心にしてメカゴジラの表象を明らかにしていくことが目的となる。対象となる作品は、メカゴジラが登場する五つの作品であり、必要に応じて関連する他の作品も検討の俎上に乗せていく。

## 二 メカゴジラ関連作品の概要

ここで、本論の考察の対象となるメカゴジラの登場す

る東宝映画作品について確認しておこう。なお、この作品リストについては、野村宏平編『ゴジラ大辞典（新装版）』（二〇一四年、笠倉出版社）を参照している。

『ゴジラ対メカゴジラ』（一九七四年公開作品）

製作…田中友幸、監督…福田純、原作…関沢新一・福島正実、脚本…山浦弘靖・福田純、音楽…佐藤勝、特技監督…中野昭慶。

『メカゴジラの逆襲』（一九七五年公開作品）

製作…田中友幸、監督…本多猪四郎、脚本…高山由紀子、音楽…伊福部昭、特技監督…中野昭慶。

『ゴジラVSメカゴジラ』（一九九三年公開作品）

製作…田中友幸、プロデューサー…富山省吾、監督…大河原孝夫、脚本…三村渉、音楽監督…伊福部昭、特技監督…川北紘一。

『ゴジラ×メカゴジラ』（二〇〇二年公開作品）

製作…富山省吾、監督…手塚昌明、脚本…三村渉、音楽…大島ミチル、特殊技術…菊池雄一。

『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』（二〇〇三年公開作品）

製作…富山省吾、監督…手塚昌明、脚本…横谷昌宏、

音楽…大島ミチル、特殊技術…浅田英一。

それぞれの作品について補足的な説明を加えておこう。一九七四年の『ゴジラ対メカゴジラ』は、東宝の『ゴジラ』（一九五四年公開）から数えて二〇周年を記念して製作された。一九七五年に開催された沖縄海洋博の関係もあって、沖縄が主要な舞台となり、そこに琉球の伝説を絡めたアクション活劇作品となっている。

一九七五年の『メカゴジラの逆襲』は、一九五四年『ゴジラ』でメガホンを取った本多猪四郎監督が、一九六九年の東宝作品『ゴジラ・ミニラ・ガバラ オール怪獣大進撃』以来久々に担当した「ゴジラ」作品であり、音楽に伊福部昭（一九五四年『ゴジラ』の音楽）を配し、さらに物語の中心人物である、人類への復讐に燃える科学者真船真三博士に一九五四年『ゴジラ』で芹沢大介博士を演じた平田昭彦を配すなどの点に大きな特徴がみられる作品である。脚本の高山由紀子はこれが脚本家としての実質デビュー作となっている。前作『ゴジラ対メカゴジラ』においてはメカゴジラを操る宇宙人（ブラックホール第三惑星人）と戦う科学者を演じた平田昭彦が、今度はそれとは正反対の、科学の力で「恐龍」（自然）を

コントロールしようとし、そのため学会から追放され、ひいては宇宙人（ブラックホール第三惑星人）と手を結び、さらに自分の娘であるサイボーグ化された真船桂（藍とも子）をメカゴジラのコントロール装置にしようという、前作の明るさに比してシリアスな内容をもった作品となっている。また、『メカゴジラの逆襲』は一九五五年の『ゴジラの逆襲』で登場した二代目ゴジラの歴史の最終作品となっている。テレビ時代を迎え、徐々に子ども向けコンテンツとなり、低予算化も進んだゴジラ映画は『メカゴジラの逆襲』でいったん終わる。その意味で、本多猪四郎監督に始まった『ゴジラ』は同じく本多猪四郎監督による、さらに初代ゴジラを葬った芹沢博士を演じた平田昭彦が登場し、音楽も伊福部昭が担当した『メカゴジラの逆襲』において終了したことはゴジラ物語の一つの完結を象徴的にも意味していたと考えられる。

一九九三年の『ゴジラVSメカゴジラ』は、一九八九年の東宝作品『ゴジラVSビオランテ』以降始まる、「VSシリーズ」と呼ばれる一連の「ゴジラ映画」の四番目に製作された作品である。ここでは、メカゴジラは先の二作での役回りからうってかわり、人類の「対ゴジラ兵

器」として開発され、千葉県幕張においてゴジラと死闘を演じる。また、このときのメカゴジラは人が搭乗して操縦するものとなっている<sup>③</sup>。

二〇〇二年の『ゴジラ×メカゴジラ』は、一九九五年の東宝作品『ゴジラVSデストロイア』でいったん終焉を迎えた「VSシリーズ」のち数年の空白を経て一九九九年公開作品『ゴジラ二〇〇〇—ミレニアム—』（製作・富山省吾、監督・大河原孝夫、脚本・柏原寛司・三村渉）から始まった新たな「ゴジラ」シリーズの四作目である<sup>④</sup>。

『ゴジラ×メカゴジラ』におけるメカゴジラにはそれまでのゴジラとは大きく異なる特徴がある。一九九三年作品と同様に、メカゴジラは「対ゴジラ兵器」として開発された機体であるのだが、特徴の一つ目としてこの作品における「メカゴジラ」の呼称は「3式機龍」（正式名称…3式多目的戦闘システム）であり、「メカゴジラ」のままでは作品のなかでは一度、しかも子どもたちの会話の中でしか登場しない。「3式機龍」の開発者のひとりである人工生物学者湯原徳光の一人娘である湯原沙羅がいふ「メカで作ったゴジラだから、メカゴジラってどうかな」の一言がそれだ。この作品においては、形象はまさ



にメカ・ゴジラでありながらも、「3式機龍」という特殊兵器として位置づけられている。そして二つ目の特徴は極めて大きなもので、この作品でのメカゴジラ（機龍）は、それが一九五四年ゴジラの骨格をベースに建造された生体ロボットであるという点にある。『ゴジラ×メカゴジラ』の世界観は、一九五四年の『ゴジラ』を直接の前身としている。一九五四年の東京襲来時において、オキジェン・デストロイヤーによって滅ぼされたゴジラの骨を千葉県房総沖で発見した日本政府が、その骨格をベースに開発したのが「機龍」であり、その意味では、「3式機龍」とはメカ化されてよみがえった初代「ゴジラ」とよぶことができる。劇中で、中尾彬演じる科学技術庁長官が「ゴジラを制するのはゴジラ」というのはまさにメカゴジラ（機龍）がもう一体のゴジラであることを示唆している。

『ゴジラ×メカゴジラ』において、メカゴジラ（機龍）は二度ゴジラと対決する。機龍の骨格をなす初代ゴジラの骨に引き寄せられるように出現するゴジラ。機龍は出動しいったんはゴジラを圧倒するのだが、ゴジラの叫びにメカゴジラ（機龍）内部に搭載されたゴジラのDNAが反応し、自衛隊のコントロールを離れ暴走し横浜市金

沢区を破壊する。その姿は、劇中で湯浅博士がつぶやくように「ゴジラ」そのものであった。暴走後停止したメカゴジラ（機龍）は改修され、再び出現したゴジラと今度は東京品川で対決する。そして、最後にゴジラを抱きかかえ太平洋の海にゴジラとともに飛び、ゴジラ対メカゴジラ（機龍）の対決は痛み分けに終わる。ゴジラは海へと去って行く。

二〇〇三年『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』は続編であり、あわせて一九六一年東宝作品『モスラ』（製作：田中友幸、監督：本多猪四郎、原作：中村真一郎・福永武彦・堀田善衛、脚本：関沢新一、特技監督：円谷英二）の続編ともなっている。ここでのメカゴジラは、改修された「機龍」であり、三度ゴジラと対決する。だが、この作品において世界観は『モスラ』に多くを負っており、さらにゴジラとメカゴジラ（機龍）との対決は、『モスラ対ゴジラ』をなぞるよう進む。そして、最後に「ゴジラ」として自我を取り戻したメカゴジラ（機龍）が自衛隊のコントロールを離れ、ゴジラとともに日本海溝に沈んでいくことで物語が終わる。なお、脚本の横谷昌宏は二〇〇一年東宝作品『ゴジラ×モスラ×キングギドラ 大怪獣総攻撃』（監督：金子修介）に

おいて金子と共同で脚本を執筆した人物であり、いわゆる東宝人脈ではなく、金子修介が監督したいいわゆる「平成ガメラ三部作」系統の人物である。

### 三 ゴジラとメカゴジラ

(一) ゴジラとメカゴジラの反転した関係性

小林晋一郎の考察に立ち戻ってみよう。小林は、「ブラックホール第三惑星人達は、単にゴジラの形態や武器を再現したにとどまらず、ゴジラが喪失した「怪獣」の持つべき本質的な意味そのものも同時に復活させてみたのである」(小林晋一郎一九九三・一五五頁)と述べる。

あらためて確認すれば、一九七四年の『ゴジラ対メカゴジラ』に始まる「メカゴジラ関連作品」において、メカゴジラの設定や由来、役回りはそれぞれ大きく異なっていることがわかる。宇宙人の侵略兵器から人類側の「対ゴジラ兵器」まで。しかしながら、メカゴジラがまさにメカである以上そこには高度な科学技術が認められ、ゴジラという巨大生物を自然の象徴と位置づけられ、メカゴジラとは科学技術の象徴、自然を征服しようとする人類の傲慢な態度の象徴ととりあえずは位置づけること

ができる。戦いの位相は変われども、自然対文明、生物対機械というゴジラとメカゴジラの対立軸は変わらない。

だが、メカゴジラのモチーフは、それだけにはとどまらない。小林晋一郎の論考は教えてくれる。メカゴジラとはもう一匹のゴジラであり、「本当のゴジラ」であり、ゴジラ自身向けられた「アイロニー」なのである(小林晋一郎一九九三・一五五頁)。このことは、一九五四年に誕生したゴジラが、二〇年後にもう一体の反転したゴジラを必要としたことを意味する。反転したゴジラすなわちメカゴジラは、ゴジラのゴジラ性を回復させる。しかし、それは単なる回復にとどまらない。ゴジラ性は極端化する。反転したゴジラはメカゴジラという血の通わない、「死」の怪物」として甦る。「ギドラは頂点に立つ悪役に違いないが、やはり生物であるがゆえの弱みもさらけ出してしまふのである。しかしメカゴジラは違う。首を吹っ飛ばされようが、どこを破壊されようが、とにかく動かなくなるまで暴れ続けるのである。その不気味なまでのふてぶてしさ、冷たさ、恐ろしさ。攻撃されても、損傷しても少しもひるまず、おのれの身をかばおうともせず、ひたすら前進し、破壊し続けるのは、とりも



なおさずメカゴジラが初めから生命を持たない——言わば「死」の怪物であるからだ」（小林晋一郎一九九三…一五四頁）。

後にふれることになるのだが、まるで、二〇〇一年の金子修介監督作品『ゴジラ×モスラ×キングギドラ 大怪獣総攻撃』における、いくら攻撃を受けても死ぬことのない「怨霊ゴジラ」の登場を予見したような小林の論述は、ゴジラという存在の根源的な脅威を指し示している。

## （二）ゴジラの「南方」、そして「英霊」「怨霊」

つぎにゴジラの「南方」について整理しておこう。「南方」は実体ではなく「抽象性を具えている」（田畑雅英二〇〇九・二二頁）といわれる。「南方」は物理的地理的な実体を示すのではなく、たとえ作品の中で南方のある島や海域が特定され固有名詞が付与され語られたとしても、やはりそれは抽象的観念レベルの「南方」を指す。抽象性は、多様な具象を産出する。そして怪獣とはその産出された具象に他ならない。と、とりあえずここまで言うことができる。

だが、しかし、「南方」が文化的に、あるいは政治的

に、あるいは社会的に産出される観念のだとすれば、当然のことながら、観念の産出に作用する現実の場があるはずであり、それを砕いていえば、産出にかかわるものたちの体験や理想が作用するはずと考えられる。

さて、ゴジラの「南方」性については、およそふたつの系統を考察することができる。ひとつめは、「南方」についてのユートピアの視線や楽園を求める視線を指す。これは発見される、あるいは発見された「南方」とよぶことができるだろう。

この「南方」イメージは、戦前の秘境小説や冒険小説にまでさかのぼると言われることがある。映画『ゴジラ』の原作を東宝プロデューサー田中友幸から依頼されたのは探偵小説で有名な作家の香山滋であった。そして、香山滋の系譜をさかのぼればそこには小栗蟲太郎がいた。

だが、「南方」イメージはもう少し複雑だったのではないだろうか。田畑雅英は東宝映画『大盗賊』（谷口千吉監督、木村武・関沢新一共同脚本、一九六三）と『マタンゴ』（本多猪四郎監督、星新一・福島正美原案、木村武脚本、一九六三）という同時期に公開された作品を素材に「南方」について考察している。そして、『大盗賊』がユートピアとしての「南方」を描いたのだとすれば、『マ

タンゴ』の「南方」はディストピアを描いているとする（田畑二〇〇九）。田畑の論考からは、「南方」がこうした錯綜したイメージで語られることには、戦前の南進論と太平洋戦争時の従軍体験とがひとり一人の作家や作り手のなかに錯綜したかたちで存在していたのではないかという問いを開いてくれる。

つぎに二番目の「南方」は怨霊である。数々の怪獣映画において、日本に現れた怪獣は東京を破壊してきた。では、なぜ怪獣は、ゴジラは「南方」から現れ、東京に襲来するのか。日本の首都である東京に襲来し、街を徹底的に破壊しながらも、皇居には背を向けるゴジラの姿に、赤坂憲雄は「太平洋に眠る英霊」をみる。

『ゴジラ』という映画の基層には、おそらく無意識の構図として、あの太平洋戦争末期に南の海に散っていった若き兵士たちの、行き場もなく彷徨する数も知れぬ靈魂の群れと、かつて彼らを南の戦場に送りだし、いま死者の者らの魂鎮めの靈力すらうしななって人間に返った、この国の最高祭祀者とが、声もなく、遠く対峙しあう光景が沈められているはずだ。（赤坂憲雄二〇一四・三八頁）

「太平洋に眠る英霊」は、しかしながらゴジラとなって日本に戻ってきててもその魂は鎮められることはない。魂の鎮められない英霊は怨霊と化す。

二〇〇一年の金子修介監督作品『ゴジラ×モスラ×キングギドラ大怪獣総攻撃』はこれまで「ゴジラ言説」のなかでみられた「英霊としてのゴジラ」「怨霊としてのゴジラ」説を具現化したかのような作品となっている。この作品のゴジラの形象は、「GMKゴジラ」と呼ばれたりもするのだが、それまでのゴジラの形象とは一点大きく異なっている。ゴジラのだ。GMKゴジラは黒目部分省略かれ白目となっている。一切の感情移入を拒否するといわれる「白目のゴジラ」は日本人にとつてひたすら恐怖の存在となる。

天本英世演じる伊佐山老人は作品の世界観の重要要素である『護国聖獣伝奇』をしたためた人物であり、ゴジラ襲来の予言者でもある。予言者としての伊佐山は、BSテレビの社員として取材にやって来た新山千春演じる主人公立花由里にゴジラの正体と、ゴジラがなぜ日本を襲うのかの理由を語る。

伊佐山は本栖署の面会室で語り出す。「ゴジラは砲弾が当たっても死なん。古代の生き残りの恐竜に、原水爆の

放射能が異常な生命力を与えたとしても、生物であるなら死ぬはずではないか。が、やつは武器では殺せん。ゴジラは強烈な残留思念の集合体だからだ。」「ゴジラには、太平洋戦争で命を散らした数知れぬ人間たちの魂が宿っているのだ。」「救われない無数の魂が集合してゴジラに宿ったのだ。伊佐山老人はこのようにゴジラの正体について語る。この太平洋戦争で死んだものたちの残留思念という規定は、ゴジラとは「英霊」であるという言説とつながってくるとしたほうが自然だろう。<sup>(5)</sup>

太平洋戦争で死んだものたちは国を守って死んだものたちだ。では、なぜそれが日本を襲うのか。劇中でも宇崎竜童演じる立花准将が娘の立花由里に問いかける。この問いに対する答えは、劇中で伊佐山老人がすでに立花由里に語っている。「人々がすっかり忘れてしまったからだ」「過去の歴史に消えていった多くの人たちの叫びを、その無念を」と。

金子修介監督の『ゴジラ×モスラ×キングギドラ』では、ゴジラは「南方」より来た。最初にグアム島沖でアメリカの原子力潜水艦を襲い、小笠原諸島「孫の手島」に上陸、人々を踏みつぶす。そして、ゴジラは静岡県焼津港に上陸する。一九五四年ビキニ環礁の水爆実験から

戻ってきた第五福竜丸の港は焼津港であった。ゴジラは焼津市街の逃げ惑う群衆に向けて強烈な放射熱線を放ち、キノコ雲を立ち上らせる。焼津港に上陸したゴジラは東へと進路を取って移動する。箱根大涌谷を賑わす観光客を犠牲者にしながら、ゴジラに立ち向かう護国聖獣バラゴンを倒す。そして、さらに東へと向かう。ゴジラが目指すのが東京なのだということは、作品では暗示的に語られる。

『ゴジラ×モスラ×キングギドラ』で描かれたゴジラとは、まさに「南方」より戻りし魂であった。魂は荒ぶる魂として災いをもたらす。ゴジラは災いをもたらす「怨霊」と化す。ゴジラは通常兵器では殺せない。殺すのではなく、魂を鎮めなければならないのだ。

さて、ゴジラが「南方」より来たりし「英霊」であり、あるいは「怨霊」であることについて、赤坂憲雄の議論に再度ふれておこう。それはなにも赤坂がゴジラすなわち「英霊」とした説を提起したからである。

赤坂は、「母」なる「南方」と「荒ぶる神」としての「南方」という、「南方」の両義性を提起する。その際、赤坂は長山靖夫の論考の次の箇所を参照しているのであるため引用しておこう。

モスラはMotherのアナグラムであるように、帰るべき母体としての南洋を象徴している。モスラは確かにインファント（幼児）島の神として原住民を守り、卵を産み続ける母なる存在であった。あの島はモスラの母性原理（女性原理ではない）に守られたユーロピアなのである。それに対し、その英名（Godzilla）にくつきりと「神（God）」の名を頂くゴジラはどうか。ゴジラは男性原理の象徴、荒ぶる神そのものであった。そのめざすところはまどろみのユーロピアなどではなく、復讐の劫火の上に打ち立てる千年王国であったであろう（長山靖夫二〇〇二・二六頁）

赤坂はこの長山の「南方」論によりながら、長山と同じく「南方」の両義性を一方でモスラに、そしてもう一方をゴジラに当てはめる。一九六四年『モスラ対ゴジラ』においてこの「南方」の両義性は描き出されている。「南方」より漂着したモスラの卵。そして「南方」より現れし「荒ぶる神」ゴジラの破壊。そのゴジラを諫め鎮めようとインファント島から飛来するモスラ。さらに、物語の最後で二匹のモスラ幼虫のはき出す系によってゴジラ

は白く包まれ海に沈んでいく。父性原理の象徴、荒ぶる神であるゴジラは、母性原理の象徴、優しく包み込む母であるモスラによって、もう一度眠りにつく。

「南方」より現れしゴジラは、同じく「南方」より現れしモスラによってその魂を鎮められる。「ゴジラ」という形象をもった魂はもはや日本に襲来しても鎮められることはない。ゴジラという怨霊は、ただただ破壊を行う。それを止める力は、いいかえれば魂を鎮める力は人間にはない。それは「南方」から来たりしもの力によってのみ鎮められる。小林晋一郎が一九七四年メカゴジラに見いだした「反転したゴジラ」は、同時に「死」の怪物であった。「死」の怪物は殺すことはできない。ただ鎮められるのみである。そして鎮める力の持ち主はおなじく「南方」より来たりしものである。長山の、そして赤坂の論考、さらに金子修介の描き出したゴジラとは「南方」より来たりし「荒ぶる神」「破壊の神」「怨霊」である。では、ゴジラの反転であるメカゴジラ、「死」の怪物と小林晋一郎が表現したメカゴジラはどのようなのであろうか。

#### 四 メカゴジラの「南方」

(一) 『ゴジラ対メカゴジラ』『メカゴジラの逆襲』の「南方」

メカゴジラ登場五作品においてみられる「南方」要素について確認していこう。

一九七四年『ゴジラ対メカゴジラ』では、メカゴジラは最初の出現地点こそ富士山付近ではあるのだが、地球侵攻を企むブラックホール第三惑星人の基地は沖繩に置かれており、メカゴジラもその基地で開発された。

前述したように、沖繩が舞台とされたことには映画の公開翌年に行われる沖繩海洋博との関係があった。そして、そのことをみれば、メカゴジラの「南方」性は認められないということになるだろう。ところが、この作品の世界観の要素に沖繩の先住民族として存在したと設定された安豆味王族の伝承が組み込まれたことによって、メカゴジラの「南方」性がかすかながら浮上してくる。『ゴジラ大辞典』の該当項目を参照しつつまとめれば、安豆味王族はかつて沖繩（琉球）の先住民族として栄えていたのだが、ヤマトンチュウによって滅ぼされそうになったという歴史がある。そして、そのときキングシー

サーと呼ばれる怪獣が出現し安豆味王族を救ったという伝承がある。以来、安豆味王族の末裔たちはキングシーサーを守り神とたたえ言い伝えてきたという歴史だ（『ゴジラ大辞典』二七頁）。

富士山噴火とともに出現した偽のゴジラ、すなわちメカゴジラ。この報を伝え聞いた安豆味王族の末裔である、今福正雄演じる国頭天願老人は呻くようにつぶやく。「ゴジラよ。安豆味王族を滅ぼそうとしたヤマトンチュウを、わしにかわってやつつけろ。ゴジラよ」。富士山噴火とともに出現し首都東京へと進撃するゴジラとはメカゴジラの擬態であり、したがって、国頭天願のいうゴジラとは誤認された「ゴジラ」ではない。ところが、ヤマトと安豆味王朝との歴史を重ねたとき、誤認の瞬間メカゴジラの擬態であったはずの「ゴジラ」に「南方」性が付与される。「ゴジラ」にヤマトへの復讐者の意味が仮託される。とはいえ、作品では、御殿場を通り、アンギラスを蹴散らし、首都圏へ進撃するや、理由や仕掛けは不明なのだが、メカゴジラ擬態「ゴジラ」の前に突如工場の建物の中からゴジラが出現し、ゴジラの放つ放射能炎によってかぶり物が焼け落ち擬態はスペースシッターニウム製の正体をあらわにする。

ヤマトンチュウ討伐が託される「ゴジラ」はかつてヤマトに滅ぼされようとした安豆味王族の怨霊である。だが、怨霊「ゴジラ」はメカゴジラの擬態であり、その機械仕掛けのすがたで沖繩の地に現れる。そして、物語の終盤、安豆味一族の守り神であるキングシーサーが復活し、やってきたゴジラの手によってメカゴジラの首はもぎ取られる。怨霊を騙るものはその首をもぎ取られたのである。

では、本多猪四郎がメガホンを取った『メカゴジラの逆襲』の場合はどうなのだろうか。沖繩を舞台にしたことよってかろうじて見いだすことができた一九七四年メカゴジラの「南方」性は、しかしながら、つづく一九七五年の『メカゴジラの逆襲』においては認めることはなはだむずかしい。前作『ゴジラ対メカゴジラ』での戦いの果てに破壊されたメカゴジラの機体は沖繩の海に沈んでいる。その機体が回収され静岡県天城山の基地に移され、そこでメカゴジラ二号としてよみがえる。ここには南方の海に沈む遺骸の再生というモチーフを読み取ることが不可能ではないが、それにしても『メカゴジラの逆襲』に「南方」性を読み込むことはやはりあまりに強引であろう。

## (二) 『ゴジラVSメカゴジラ』の「南方」

一九九三年の『ゴジラVSメカゴジラ』の作品世界に「南方」を読み取ろうとするのは一見するとむずかしい。しかしながら、一九九一年の『ゴジラVSキングギドラ』の物語にまでさかのぼることによって「VSシリーズ」のメカゴジラの「南方」性は明らかとなる。なぜなら、このときのメカゴジラは一九九一年キングギドラの係累だからである。

『ゴジラVSキングギドラ』は、来訪した未来人のタイムワープ技術を利用してゴジラの存在そのものを歴史から抹消しようとして始まる。大森一樹の脚本では、それまで明示的には語られていなかったゴジラの前身、すなわち水爆実験によって誕生する以前の古代恐竜の生き残りの素性について初めて公に語られる。ゴジラザウルスと呼ばれるその恐竜は、南海の島ラゴス島（マーシャル諸島のルオット島とクエゼリン島に挟まれた小島。『ゴジラ大辞典』二九八頁）に一九四四年に目撃された古代生物の生き残りである。未来人たちは第二次大戦末期の一九四四年、日本軍のラゴス守備隊とアメリカ海軍との激戦が繰り広げられているラゴス島へとタイムワープし、一九五四年のビキニ環礁での水爆実験の結果ゴジラザウ



ルスがゴジラへと変異することを回避させるために、ラ  
グス島のゴジラザウルスをベリーング海へとテレポート  
させる。その結果、水爆実験時にゴジラザウルスは島に  
はおらず、ゴジラ誕生は「なかったこと」とされる。

ところが、未来人たちは未来から持ってきた愛玩動物  
をゴジラの代わりに島においていき、水爆実験の洗礼を  
受けさせる。そして、その結果誕生したキングギドラを  
使い現代の世界を攻撃し、歴史を変えようとする。

だが、北極海に移されたゴジラザウルスは原子力潜水  
艦の事故による放射能の影響でゴジラへと変異する。そ  
して、北海道に上陸したゴジラはキングギドラと戦いこ  
れを滅する。話がかなり込み入っているのだが、いった  
んはゴジラの手によって滅ばされたキングギドラの遺体  
は、未来人の別の組織によって回収され、メカ化され再  
びゴジラの前にメカキングギドラとして立ちはだかる。  
そして、東京新宿都庁付近での決戦を経て、メカキング  
ギドラはゴジラとともに太平洋の海へと沈んでいく。

長々と説明を加えてきたのだが、『ゴジラVSメカゴジ  
ラ』に登場するメカゴジラとは、太平洋に沈んだメカキ  
ングギドラの残骸を回収した日本政府が未来人のテクノ  
ロジーを研究し利用してつくり出した対ゴジラ兵器と

なっている。

ゴジラとなるべき存在はキングギドラへとすり替わつ  
た。ゴジラが本来まとうはずであった「南方」という  
「荒ぶる神」の破壊の力はキングギドラへとすり替わる。  
そして、このすり替わりのさらなる変異がメカゴジラと  
なる。このメカゴジラは、『ゴジラVSメカゴジラ』の終  
盤ゴジラの手によって徹底的に破壊される。「南方」の荒  
ぶる神ゴジラは、「北方」より帰還し、玉座を横取りした  
キングギドラを滅ぼし、さらにその末裔であるメカゴジ  
ラを滅ぼす。

だが別の解釈をすることもできる。それはすり替えに  
よって「南方」の荒ぶる神を鎮める力、鎮魂の力を授  
かったという解釈だ。メカキングギドラの話まで巻き戻  
そう。メカキングギドラは、対ゴジラ兵器である。そし  
てゴジラとの激闘を経て最後に荒ぶるゴジラを捕獲し、  
太平洋へと沈む。このときメカキングギドラはゴジラと  
いう「南方」を鎮めるものでもある。メカキングギドラ  
の前身はキングギドラであり、ゴジラザウルスとすり替  
わることで「南方」で誕生した怪獣である。本来であれ  
ば、「南方」性を身にまとうはずもなかったものが人間の  
計略により人工的に「南方」をまとった存在ともいうこ

とができる。そうであれば、メカキングギドラの末裔であるメカゴジラには人工的な「南方」の残滓が含まれているとみることもできるのではないだろうか。だがしかし、メカキングギドラにはみとめられた「南方」の鎮める力をメカゴジラは取り違える。メカゴジラはあくまでゴジラに対抗するもう一つの荒ぶる神として振る舞おうとする。キングギドラのように、そしてかつてのモスラのように、抱きかかえゴジラを海へと還すという選択はとらず、ゴジラを物理的に抹殺しようとする。メカゴジラはこの過ちゆえに、それゆえに、ゴジラの放射熱線によって無残にそして徹底的に破壊される。

一九六四年の『モスラ対ゴジラ』におけるモスラのように、二〇〇三年の『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ』のように、メカキングギドラはすり替わることによって「南方」の鎮める力をまとい、その力を持って「南方」を鎮めるものへと転換する。キングギドラ、メカキングギドラの末裔であるメカゴジラは、ゴジラに敗れ、ゴジラは南の海へと還っていく。

(二) 『ゴジラ×メカゴジラ』『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ』の「南方」

二〇〇二年『ゴジラ×メカゴジラ』におけるメカゴジラは、端的に言えば、ゴジラの分身とみなすことができる。一九五四年に日本に襲来しオキシジェン・デストロイヤーによって海の底でとがされたゴジラの骨格、その骨格と遺伝子を利用して開発されたのが生体ロボットである「3式機龍」すなわちメカゴジラだからだ。「機龍」は滅ぼされたゴジラの骨格が金属製の表皮を被ったメカ・ゴジラなのである。一九五四年ゴジラが暗に纏っていた「南方」性は「機龍」の骨格と遺伝子において保存されている。しかしながら、作品においてそのことは明示的には語られない。「機龍」は対ゴジラ兵器として開発され、再び来襲したゴジラ、じつはメカゴジラ内部のゴジラの骨格に呼応して出現したのだが、と戦う。

このときの「機龍」すなわちメカゴジラとゴジラとの関係は「父と子」というかたちで語ることができる。父の骨を拾いにやってきた息子のゴジラ、しかし、父の中に眠るゴジラ性は一度は息子の叫びによって覚醒するのだが、その後人間の手によって封印され抑圧される。ゴジラは人類によって制圧される。物語の最後、ゴジラと「機龍」とは引き分け、機体に大きなダメージを受けた機龍を残しゴジラは海へと還っていく。

一九五四年ゴジラの骨格というかたちで放り出された

「機龍」の「南方」性はつづく『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』において回収される。この作品は、先に述べたように一九六一年の『モスラ』を前史としてもっている。にもかかわらず、一九六四年の『モスラ対ゴジラ』は「なかったこと」にされている。しかしながら、物語は『モスラ対ゴジラ』をなぞっていく。『モスラ対ゴジラ』において、台風のために日本の浜辺に漂着してしまったモスラの卵をインファント島に戻そうと小美人が現れる。このときのモスラの卵は『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ』における「機龍」に対応する。『モスラ対ゴジラ』において小美人は「モスラの卵をかえしてください」といい、『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ』において再び現れた小美人は「ゴジラの骨を海に返してください」という。南方の使者である小美人は「南方のものは南方へ」と訴える。物語の終盤、『モスラ対ゴジラ』のときと同じように双子のモスラ幼虫の糸にゴジラは絡め取られ、「機龍」がとどめを刺そうとしたとき、「機龍」のなかの初代ゴジラが目覚める。そして、「機龍」すなわち初代ゴジラは二代目ゴジラを抱え太平洋の日本海溝の奥深くにその魂を永遠に鎮めるかのように沈んでいく。

## 五 メカゴジラの南方からゴジラの南方へ

五作品のメカゴジラから得られた「南方」要素について、あらためてその流れを整理すればこうなるだろう。

まずは一九七四年メカゴジラ。このときのメカゴジラは、「南方」の破壊の神を騙るものであった。メカゴジラは破壊の神と誤認され、正体を現してのち南方を破壊しようとする破壊者であった南方を騙る偽物は、南方の神であるキングシーサーとゴジラによって徹底的に破壊され、その首を捧げることとなった。次に一九九五年メカゴジラは、「南方」玉座をかすめ取った偽者であった。しかしながら、ただの位相的な偽物ではなく、「力」をも奪い取った偽物であった。破壊の神の力の持ち主となるはずであったゴジラザウルスを追放し、すり替わることでその力を奪い取った「南方」の持ち主であった。そして最後に、二〇〇二年メカゴジラ（機龍）は、飼い馴らされた「南方」であり、回復する「南方」であった。ゴジラの分身であることよって「南方」の資格者であるにもかかわらずその力を封印され、人間に飼い馴らされた「南方」であった。「南方」に対抗しうるのは「南方」なのである。しかしながら、日本人が「南方」を制御する

ことは禁忌である。モスラという「南方からの呼びかけ」によって「南方」を取り戻し海へと還っていった。

これまでのメカゴジラ作品で設定されたゴジラとメカゴジラとの反転的存在関係は、「南方」要素についてもこのように確認することができる。もちろん、この結論については問題が残る。というのも、作品それぞれの脚本、監督の意思、彼ら彼女らに何が作用したのか、何を参照したのがメカゴジラの設定に大きくかかわるからだ。とりわけ、手塚昌宏監督の製作した『ゴジラ×メカゴジラ』『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ』においては『モスラ』を前史とし、『モスラ対ゴジラ』へのオマージュという点で確信的にそのことが認められる。だが、こうも考えることができるのではないか。メカゴジラがゴジラの反転として産み出された以上、メカゴジラの物語も必然的にゴジラをなぞるのだと。メカゴジラは合わせ鏡としてゴジラを引き受ける。メカゴジラはゴジラから逃れることはできない。ゆえにメカゴジラはゴジラが背負う「南方」から逃れられないのだと。だから、この結論はいやおうなくゴジラの「南方」への問いとあらためて向き合うことを必然とする。

## 【注】

(1) 水爆実験によってゴジラが生まれたという描写は、香山滋の原作段階にはあったが、監督の本多猪四郎はその部分を大幅にカットした。本多猪四郎二〇一〇（一九九四）

(2) 『海底軍艦』の「南方」については、長山靖夫二〇〇二を参照されたい。

(3) 一九七五年『メカゴジラの逆襲』でいったん幕を閉じた東宝ゴジラ・シリーズは、「ゴジラ」ファン、怪獣ファン、特撮映画ファンの世界の盛り上がりを受けて一九八四年に再開される。この一九八四年『ゴジラ』の世界観において、一九五四年『ゴジラ』が直接の前史とされ、一九五五年の『ゴジラの逆襲』から一九七五年『メカゴジラの逆襲』までの歴史はなかったことにされている。一九八四年『ゴジラ』に始まったゴジラの新シリーズは一九九五年の『ゴジラVSデストロイア』でのゴジラ消滅（劇中では、ゴジラの子どもが新しいゴジラとして再生する）までほぼ同じ設定の世界観をもった作品が製作され、それらはもうひとつの『ゴジラ・サーガ』と呼ぶことができる。

(4) 一九九九年の『ゴジラ二〇〇〇—ミレニアム—』か

ら、東宝の富山省吾の主導のもと、あらたにゴジラ作品が製作された。その際、世界観は一新され、一九九九年『ゴジラ二〇〇〇』、二〇〇〇年『ゴジラ×メガギラスG消滅作戦』、二〇〇一年『ゴジラ×モスラ×キングギドラ大怪獣総攻撃』、二〇〇二年『ゴジラ×メカゴジラ』、二〇〇三年『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ』、二〇〇四年『ゴジラ FINAL WARS』はそれぞれ、一九五四年の『ゴジラ』を前史とする点では共通だが、それ以外の設定や歴史は異なるものであり、いわばパラレルワールドの関係をなしている。

(5) ただし、赤坂憲雄の議論と金子修介『GMK』との間に直接の関係はないと考えられる。筆者が金子修介監督から直接聞いたかぎりでは、監督自身、赤坂の論を読んでいないということであった。

#### 【参考文献】

赤坂 憲雄 二〇一四『ゴジラとナウシカ—海の彼方より訪れしものたち』イースト・プレス

本多猪四郎 二〇一〇(一九九四)『ゴジラ』とわが映

画人生』ワニブックス新書

切通 理作 二〇一四『本多猪四郎—無冠の巨匠』洋泉社

小林晋一郎 一九九三『形態学的怪獣論』朝日ソノラマ  
長山 靖生 二〇〇二『怪獣はなぜ日本を襲うのか』筑摩書房

野村宏平編 二〇一四『ゴジラ大辞典(新装版)』笠倉出版社

小野俊太郎 二〇〇七『モスラの世界史』講談社現代新書

田畑 雅英 二〇〇九『南方』のユートピアとデイス  
トピア—『大盗賊』と『マタンゴ』の南方  
世界—(『相模女子大学紀要』Vol.73A)  
(本学教授)